慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	講演会 Buddensiek教授連続講演会報告（3月2日 大学院校舎334教室、3月4日 南館4階カンファレンスルーム) ; UVic-Keio Joint Seminar on Cognitive Psychology報告（3月12 - 16日 University of Victoria, Canada）
Sub Title	Two philosophical lectures by Prof. Buddensiek
Author	Ertl, Wolfgang(Iida, Takashi) 飯田, 隆(Ito, Yuji) 伊東, 裕司
Publisher	慶應義塾大学グローバルCOEプログラム論理と感性の先端的教育研究拠点
Publication year	2009
Jtitle	Newsletter Vol.8, (2009. 6) ,p.5- 5
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO12002003-00000008-0005

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

講演会

Buddensiek 教授連続講演会報告
Two Philosophical Lectures by Prof. Buddensiek

（3月2日　大学院校舎 334 教室、3月4日　南館4階カンファレンスルーム）

2009年3月2日と3月4日の両日にわたって、フランクフルト大学のフリーデマン・ブッデンジーク教授をお招きして二回の連続講演をしていただいた。その話題は古代の知識論から現代の形而上学的探究にまでわたった。

最初の講演で取り上げられたのはプラトンの『テアイテトス』である。ブッデンジーク教授は、井戸の底のタレスについての対話編中の挿話の新しい解釈を提示した。トラキア人の女召使が、タレスの世間知らずを嘲笑したという挿話である。タレスが井戸に「落ちた」とするのは、この女召使の間違った考えであって、彼女は、タレスが天文観測を行うために井戸に「降りた」のを理解しなかったのである。ブッデンジーク教授によれば、この挿話は、テアイテトスのような哲学を志す若者への警告として意図されている。すなわち、哲学の道を選ぶことは、まったく根拠のない中傷の的となりうるだけでなく、ソクラテス自身に起こったことが示すように、より世俗的な人間の不吉な「必要」の邪魔となって命を失うという危険さえ伴うという警告である。

第二の講演では、個体性と一者性という、現代の存在論に属する話題が取り上げられた。この講演によれば、部分とは、自己制御によって外界と対峙できる動的構造に因果的寄与を行う存在であり、個体とは、こうした動的構造のことである。この説明は、一方で、椅子のような単純な人工物や、石のような単なる物や特殊者を個体から除外し、他方、ロボットのような精巧に作られた人工物を個体の中に数えいれるという点で、われわれの通念を変革しようとするものである。（ヴォルフガング・エアトル＆飯田隆）

In the early March of 2009, Prof. Buddensiek of the University of Frankfurt gave two philosophical lectures. They are titled “From Ancient to Contemporary Metaphysics and Epistemology: Selected Topics.” In the first lecture Prof. Buddensiek talked about Plato’s dialogue *Theaetetus*. He presented a new reading of the anecdote which depicts the philosopher Thales at the bottom of a well. The second lecture treated a topic of contemporary ontology, namely the issue of individuality and unity. Prof. Buddensiek argued that the question of individuality and unity needs to be addressed via the notion of parthood.

UVic-Keio Joint Seminar on Cognitive Psychology 報告

（3月12－16日　University of Victoria, Canada）

カナダの Victoria 大学の S. Lindsay 教授と共同で認知心理学に関するセミナーを企画・実施した。日本からは4名の大学院生と伊東が Victoria を訪れ、Victoria 大学におけるさまざまなプログラムに参加した。これらには、同大大学院の授業科目（いわゆる「ゼミ」を含む）の聴講、心理学研究室で定期的に行っている Cognitive Seminar と称する講演会への参加などが含まれるが、中心的なプログラムは13日に行われた大学院生による研究発表会であった。

Lindsay 教授に最初に Joint Seminar について相談した時には、3月中旬は学生も教員も多忙な時期であるとのことで Joint Seminar の開催の実現が一時危ぶまれたこともあり、研究発表会への現地からの参加者の数に不安があった。しかし蓋を開けてみると、発表者と企画者2名の他に心理学のファカルティメンバー数名を含む10数名の参加者を得ることができた。発表は、日本からの院生のもの4件と Victoria 大の院生のもの4件の計8件であった。Lindsay 教授は2007年に慶應で集中講義をもたれた方で、日本から参加の院生は皆、フレンドリーな人柄を知っていたのだが、それでも同大の教授陣をはじめとする大勢の前で英語で発表することには緊張を強いられたようであった。特に討論の部分では苦労することが多かったようだが、これはこのような機会に苦労をして慣れていくしかないものであろう。みな、十分に準備に時間をかけ、発表、討論とも無事にこなしているようであった。一方、他の発表に対して質問や意見を述べるほどの余裕はなかったようで、その点が今後の課題と考えられる。

研究発表会のあった13日の晩には、発表者はみな Lindsay 教授のご自宅で開かれたパーティに招待された。料理好きの Lindsay 教授が自ら作られたモレイユ茸ソースをかけたサーモンのグリルや地元産のワインに舌鼓を打ちながら、Victoria の院生たちと楽しい交流の時間を持つことができた。公式なプログラム、非公式な活動とも充実したセミナーであった。（伊東裕司）

The UVic-Keio Joint Seminar on Cognitive Psychology was held in the middle of March. Four graduate students and a professor from Keio University visited the University of Victoria and joined in several academic activities there, including graduate seminars and a lab meeting. The core program of the joint seminar was eight talks, four by UVic graduate students and four by Keio University graduate students. More than 20 faculty members and students listened to and discussed the talks.